

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	European Studies の研究ツール開発に関する研究 (5)				
研究組織	代表者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	栗田 和典
	研究分担者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	前山 亮吉
		所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	剣持 久木
		所属・職名	経営情報学部・教授	氏名	上野 雄史
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	小窪 千早
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	小谷 民菜
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	佐藤 真千子
		所属・職名	国際関係学研究所・准教授	氏名	浜 由樹子
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	マティアス・ファイファー
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	堀内 賢志
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	森 直香
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	宮崎 晋生
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	米山 優子
		所属・職名	国際関係学部・講師	氏名	石川 義道
発表者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	栗田 和典	

講演題目
European Studies の研究ツール開発に関する研究 (5)
研究の目的、成果及び今後の展望
<p>【目的】 本研究の目的は、国際関係学研究所附置の広域ヨーロッパ研究センター（Wider Europe Research Center）の研究活動の成果を、国際関係学部および国際関係学研究所の教育に資するものへと展開することである。「広域ヨーロッパ」は、いわゆるヨーロッパの諸地域や国家が集塊化と流動化をくり返し、多様性と一体性を有する地域世界である。アフリカおよび南北アメリカ地域とともに環大西洋世界を構成し、歴史的にはアジア太平洋地域とも強いつながりがある。この対象の理解を深めるには、国際関係論をはじめ、政治学、経済学、文化研究、言語学、文学研究、歴史学など、さまざまな視点からなされた研究成果の活用がもとめられる。</p> <p>【成果】 2022年度は6年計画の第五年度であった。過去4年間の取り組みを踏襲し、年度計画では、研究分担者が報告する研究会、および外部機関の研究者等を招聘する特別講義、ワークショップ、シンポジウムの開催、ウェブサイトに登載した教育資料の充実、国内外の教育機関との情報交換、合同ゼミ学生発表会などをあげた。2021年度につづいてオンライン会議システムを利用することで、国外ならびに国内の遠隔地から講師の招聘が可能になり、共済をふくめて10件の特別講義・セミナーを開催できた。ブレーメン（ドイツ）やイスタンブル（トルコ）などの海外から、また、高知や東京などから講演がリアルタイム同時配信でおこなわれた。5ゼミの参加を得て12月に開催された合同ゼミ学生発表会では、ボアジチ大学からの交換学生の発表があった。今年度はとくに、客員研究員の参加が顕著であり、前年度の六鹿茂夫氏につづき、梅本哲也氏、ギン・クット氏（ボアジチ大学）が研究会の発表者、特別講義の講師、特別セミナーでの院生指導をおこなった。2022年2月からつづくロシアによるウクライナ侵攻に関連して国際政治、国際関係にかかわる発言、報告、研究が活発におこなわれたのが特徴であり、その一方で中長期的な日常生活に目を向けた研究の交流も継続中である。</p> <p>【展望】 本研究の直接の成果につながる研究ツールの作成の準備は、今年度もまた卒業研究や修士論文にとりくむ学生の傾向および学会動向の把握を継続した。合同ゼミ学生発表会で学生が取り組んだテーマにはジェンダーや集合的記憶／パブリック・ヒストリがふくまれており、学生の傾向と学会動向との同期を確認できた。過年度とおなじく研究ツールの提示のしかたとして、①基本的な事実や先行研究における共通の了解事項を説明すること、②その事実や事項にたいする複数の議論の要点を示すこと、③複数の視点から考察をうながす問いをみちびくこと、という構成が可能になるようにこころがけたい。広域ヨーロッパのもつ国際関係の複雑さ、地理的、歴史的な多様性の側面を多様なままに、しかし、一体として論じる視点の確立を次年度の課題とする。</p>